

# Cyrano カルテジャン

## (1)

赤 木 昭 三

Lachèvre と Léo Jordan による *Estats et Empires de la Lune* などの未削除写本の刊行, Lachèvre による伝記の書きかえ以後の数十年間は、ほとんどみるべきものがなかった Cyrano 研究も、近年にわかに活況を呈し、諸家による新しいCyrano解釈も相次いで発表された<sup>1)</sup>が、それらを閲読すると、評家の並々ならぬ努力に敬意を表することにやぶさかではないけれども、Cyrano 研究に関しては、まだまだ細かい細部のつみ重ねが必要な段階ではなからうかという感がつよい。さまざまな要素のからまり合って複雑な総体を形づくっている *L'Autre Monde* については、とくにそのことがつよく云えるのであって、多種多様な異質の思想やイメージの各々の出所由来を、またそれぞれの微妙な照応、対比や全体との関連などを一つ一つ掘り出していく根気強い作業なしには、せっかく呈示された輝かしい全体像も、恣意的な一人合点におわるおそれがある。この点注目に値するのは、とくに *sources* の面で新しい発見や正確化をもたらした Alcover 女史の地味な労作であるが、そこにも当然のことながら不正確や誤りや追求の不足が見られるし、またいまだに出所不明の箇所も少なからずのこっている。そこで今回はまず手始めにCyrano と Descartes の関係を、それも *L'Autre Monde* における Descartes の影響という点にしぼって調べてみることにした。

ここで Descartes の影響からはじめることにしたのは、大した理由があるわけでもないが、baroque の文人哲学者、burlesque の名手、《visionnaire》、《imaginaire》Cyrano が、デカルト的合理主義にどのような反応を示すかはそれ自体として興味を唆られる問題だし、それにまた Descartes と同時代と

の関係の究明は、Corneille や Racine や Molière らにくらべて、また Pascal と比較しても大へんおくれている、《Corpus Cartesiano》などは到底のぞむべくもないので、その点を多少とも明らかにできたらと思うのである。Cartésianisme がようやく浸透しはじめた 1660 年代以前については殊に手薄であって、Descartes のことに触れた文献にはあまりお目にかからないが、しかし一方 Cyrano の言葉を借りると、Descartes は 《fameux philosophe de notre temps》<sup>2)</sup> なのである。そして、1650 年前後に書かれ、1657 年と 1662 年に世に出た *L'Autre Monde* は、Descartes の思想がそのなかに影をおとしたおそらく最初の文学作品、Descartes その人が登場するほとんど唯一の作品とあってよく、そのいみでも、この方向からこの作品に光をあてるのもまた一興ではないかと思われる。ところで Descartes との関係を論じるに当たって問題になるのは、*L'Autre Monde* を構成する *Estats et Empires de la Lune* と *Estats et Empires du Soleil* という 2 つの作品の相違、とくに思想的な相違であり、これに関しても種々異った解釈があるが、ここではそれについてはできるだけ触れないで、まず Cyrano がこの 2 つの作品の中で Descartes から直接とったと思われるもの、Descartes の作品以外から借用することがまずありえないと思われるものがどれだけあるか、どれとどれかをはっきりさせることにしたい。以下その具体的な調査に入るが、この問題にも長い研究の歴史があるので、最初にこれまでの諸家のさまざまな意見を一応整理しておく必要がある。明確な見解を表明していない評家(たとえば Mongrédien 氏<sup>3)</sup>)については触れない。

**研究の歴史** まず古いところで Paul Lacroix は、それまで gassendiste だった Cyrano が *Estats et Empires du Soleil* (以下 *Soleil* と略記する) では cartésien になったと主張する<sup>4)</sup>。Lachèvre もこれにしたがっているように見える<sup>5)</sup>。この説をさらに押進めたのは Vartanian 氏であって、同氏は *Estats et Empires de la Lune* (以下 *Lune* と略記する) がはっきり Gassendi の教えを反映しているのにたいし、*Soleil* はその 《inspiration》を「完全に」wholly, Descartes から得たとまで極言している<sup>6)</sup>。以上を「Cyrano=

cartésien」派とすれば、これと鋭く対立するのは Spink 氏であって、二つの空想旅行記には Descartes の影響はみられず、たまたま Descartes の説と矛盾しない思想があっても、それは当時の科学者の《lieux communs》にすぎないと主張する<sup>7)</sup>。それほど極端な否定ではないが、*Soleil* の分析でさまざまな箇所の新らしい sources として Descartes をあげながらも、「だが Cyrano は *L'Autre Monde* において Descartes の体系の信奉者だったことは一度もなかった」と結論する Alcover 女史<sup>8)</sup>も「Cyrano 非 cartésien」派に加えてよかろう。最後に Harth 女史は両者の中間ともいえる立場であって、*Lune* では gassendiste だった Cyrano が、*Soleil* では、Descartes 説を知って両者のあいだで躊躇し、論を斗わせ、態度を決定していない段階にあり、一そう決定的に Descartes 説に傾いているのは *Fragment de Physique* においてである<sup>9)</sup>（この作品についてはのちにのべる）。このように Cyrano と Descartes の関係というこの問題では Cyrano cartésien 説、非 cartésien 説、中間派と意見が分かれ、しかも肯定にも否定にも、それぞれさまざまに程度の相違がある。したがってこのデリケートな問題に近づくためには、できるかぎり先入見を捨て去り、texte の詳細、綿密な分析や比較をおこなうことが必要とされるだろう。以下具体的な検討に入ろうと思うが、その前にさっき一寸登場した *Fragment de Physique* をめぐる問題の所在について簡単に触れておかなければならない。Cyrano と Descartes の関係というテーマの検討には、この *Fragment de Physique* の問題を避けて通ることができないからである。

***Fragment de Physique*** Cyrano 急死の5年後、1662年に *Les nouvelles Oeuvres de Monsieur de Cyrano Bergerac* と題する一本が上梓されたが、それには *Soleil*、若干の手紙および *Entretiens pointus* の他に *Fragment de Physique* なる未完の作品が含まれていた。Paul Lacroix 版著作集でわずか28頁<sup>10)</sup>、1741年版著作集でも12折本52頁<sup>11)</sup>のこの小品は、Jacques Rohault の作と推定されている短い préface につづいて、完成のあかつきには3部 trois parties 以上にもなったであろう全体の「詳細目次」Idée générale de

la physique および冒頭の7章とからなっていた。この未完の作品の内容が、9年後の1671年に出版された Rohault の *Traité de Physique* と酷似していることを最初に発見したのは Lacroix だったが、かれはこの類似から、Rohault がその敬愛する友人 Cyrano を模倣したものと推測し<sup>12)</sup>、Brun もこれにしたがった<sup>13)</sup>。その後1921年に Lachèvre が両者の関係を逆転し、「軍人が専門の学者に教えを垂れるものではない」と正当にも判断して、模倣したのは Cyrano の方であると結論した<sup>14)</sup>。以後最近の Alcover 女史にいたるまで、この2点、すなわち Cyrano の作品が Rohault のそれに極めてよく似ていること、この点で教えを垂れたのは Cyrano でなく Rohault の方であることの2点は一般に承認されている<sup>15)</sup>。

ところが Rohault は人も知る cartésien のチャンピオンだから話はややこしくなる。先程の Cyrano cartésien 派にとってこれはさしたる問題ではない。この作品と Cyrano の他の作品、とくに *Soleil* とのあいだに矛盾はないばかりか、むしろこの小品の存在は、Cyrano cartésien 説を確認するための重要な証拠でさえある<sup>16)</sup>。また中間派の Harth 女史なども、だんだん cartésien に変貌していった Cyrano がもっとも Descartes に近づいた段階を示したものとして、大いにこれを利用している<sup>17)</sup>。これに反して Cyrano 非 cartésien 派にとって事は重大であって、たとえば Spink 氏は Cyrano が一時期 Rohault の影響を受けた可能性のあることは認めながらも、*Fragment* が Cyrano の他の作品とは、したがって他の作品の解釈には、ほとんど何の関係もないと主張する<sup>18)</sup>し、Alcover 女史にいたっては、*L'Autre Monde* の解釈にあたってこの作品を全く無視し、それが Cyrano の作品であることにさえ疑いをはさんでいる<sup>19)</sup>。片々たる小品であるが、このような見解の対立、解釈の相違がある。詳しくは次稿で論じることになるが、以上を考慮においた上で、いよいよ *L'Autre Monde* に cartésianisme の影を探すという具体的な作業に入ることにして(引用は Lachèvre 編 *Les Oeuvres libertines de Cyrano de Bergerac*, 1921, tome I により、以下頁数のみを示す)。

***Estats et Empires de la Lune*** まず第一作 *Lune* であるが、この作品に Descartes の影響の跡を指摘した評家はないし、また筆者自身が調べたかぎりではなさそうである。そればかりか、いくつかのテーマでは Descartes と真向から対立する説明がなされている場合もある。たとえば彗星の説明(p. 50)がそうだし、月の国の女王に飼われているスペイン人が物語る真空肯定論 (p. 45 以下) も、月の国の Académiciens がのべるアトム肯定論も、火のアトムが原動力となって宇宙の万物が形づくられる論も、アトムによる五官の働らきの説明も(p. 78 以下) そうである(詳しい説明は紙数の都合で省略する。真空論義については、あとでもう一度問題にする)。

***Estats et Empires du Soleil*** そこでいよいよ *Soleil* だが、この作品の中で Descartes の影響が指摘されている箇所は5つある。その一つ一つを順次検討していこう。

(a) ***icosaèdre*** Cyrano は、幽閉されていた塔の上から逃げ出すために奇天烈な器械を製作する。三尺四方、高さ六尺の箱で、天井と床に穴をあけ、やはり上下に穴をあけた大きいクリスタルガラスの二十面体 *icosaèdre* を天井の穴にとりつけると、太陽光線に照りつけられた透明な二十面体の中で空気が熱せられて上の穴から逃げ、空虚が生じる。その空虚を満たそうとして、箱の下方からおそろしい勢で空気が吹きこみ、器械全体を押し上げ、かくて箱の中に坐った Cyrano は天空高く持ち上げられる…

Le reste ne me surprit pas car j'avois bien prévu que le vuide qui surviendroit dans l'icosaèdre à cause des rayons du soleil par les verres concaves, attireroit, pour le remplir, une furieuse abondance d'air dont ma boiste seroit enlevée ; et qu'à mesure que je monterois, l'horrible vent qui s'engouffreroit par le trou ne pouroit s'élever jusqu'à la voûte qu'en pénétrant cette machine avec furie, il ne la poussât en haut (pp. 123-124).

この *icosaèdre* を動かす原理が「真空嫌悪」であることをはじめて指摘したのは有名な科学史家 Duhem である<sup>20)</sup>が、Duhem はまたこの点で Cyrano が Descartes の影響を受けたとしている。これにたいして Alcover 女史は

Baillet の、Descartes は1638年来真空嫌悪を軽蔑していた云々の条りを引用して、この点で Descartes の影響を受けたことはありえないと一蹴している<sup>21)</sup>が、しかし Descartes も、たとえば1633年執筆の *Le monde* では真空嫌悪を肯定しているようなふしもみられる<sup>22)</sup>のであって、問題は女史の考えている以上に複雑だと思われる。Baillet は Descartes が Galilée の *Discorsi* を批判した手紙 (Mersenne 宛, 1638年10月11日付) を参照している<sup>23)</sup>のではあるが、それにしても Baillet という他人の、しかも死後40年以上も経て書かれた伝記の一節だけでもって片付けるのは軽率に過ぎるので、1655年までに出版された Descartes の著作の中で真空の問題に言及した箇所、とくに *Principes* のそれ (II, 5 et 16—19) が、Descartes を真空嫌悪支持派と誤解しうるような説明を含んでいないかなどについて、精密な分析をする必要があるのではなかろうか。だがそれはそれとして、*Soleil* 執筆の時期、つまり Pascal らによる真空実験の後でも真空嫌悪説はむしろ多数意見だったろうから、この点で Descartes の影響を云々するのが見当違いであることだけは明白である。

(b) 宇宙の創成、天体の誕生と惑星の運動、太陽系の歴史 さて Cyrano の器械はどんどん上昇をつづけ、月、金星、水星のそばを通過して太陽に近づくが、これらを観察しながら、かれは「この大きい宇宙の組立てられた原因」について冥想する。そして神が物質を創造し、その「混沌を整理されたとき」、「未知の愛なる原理」によって同類が同類とむすびつき、空気やさまざまの恒星、惑星がつくられたいきさつ、惑星が恒星のまわりをまわる原因をのべ (以上を前段とよぶことにする)、つぎに太陽をめぐるさまざまの惑星がかつては太陽であったこと、また太陽もいつかは地球同様「不透明な球」になることは必定であり、その証拠は太陽の表面に形成される外皮 *crouste*、つまり黒点であることなどを説明する (以下を後段とよぶことにする)。

Resvant depuis aux causes de la construction de ce grand Univers, je me suis imaginé qu'au débrouillement du Cahos, après que Dieu eut créé la matière, les corps semblables se joignirent par ce principe d'amour inconnu, avec lequel nous expérimentons que toute chose cherche son pareil. Des particules formées de certaines façons s'assem-

blèrent, et cela fit l'air ; d'autres à qui la figure donna possible un mouvement circulaire, composèrent en se liant les globes qu'on appelle Astres, qui, non seulement à cause de cette inclination de piroüetter sur leurs pôles, à laquelle leur figure les nécessite, ont dû s'amasser en rond, comme nous les voyons, mais ont dû mesme, s'évaporant de la masse, et cheminant dans leur fuite d'une allure semblable, faire tourner les orbes moindres qui se rencontroient dans la sphère de leur activité. C'est pourquoy Mercure, Vénus, la Terre, Mars, Jupiter et Saturne ont esté contraints de pirouëtter et rouler tout ensemble à l'entour du Soleil. Ce n'est pas qu'on ne se puisse imaginer qu'autrefois tous ces autres globes n'ayent esté des Soleils, puis qu'il reste encor à la Terre, malgré son extinction présente, assez de chaleur pour faire tourner la Lune autour d'elle par le mouvement circulaire des corps qui se déprennent de sa masse, et qu'il en reste assez à Jupiter pour en faire tourner quatre. Mais ces Soleils, à la longueur du temps, ont fait une perte de lumière et de feu si considérable par l'émission continuelle des petits corps qui font l'ardeur et la clarté, qu'ils sont demeurez un marc froid, ténébreux, et presque impuissant. Nous découvrons mesme que ces taches qui sont au Soleil, dont les Anciens ne s'estoient point aperçeus, croissent de jour en jour. Or que sçait-on si ce n'est point une crouste qui se forme en sa superficie, sa masse qui s'éteint à mesure que la lumière s'en déprend, et s'il ne deviendra point, quand tous ces corps mobiles l'auront abandonné, un globe opaque comme la Terre? (pp.127—128).

この説と Descartes との関係をはじめて指摘したのは Brun であるが、かれは漠然と黒点のことに触れ、Fontenelle の文章を引いたのみだった<sup>24)</sup>。ついで Vartanian 氏が前段、後段を通じてこの箇所に Descartes の影響が見られると主張したが<sup>25)</sup>、最近の Alcover 女史は、前段に関しては Descartes の影響を否定する一方、後段については、それが Gassendi の見解と関係がないことを示して Descartes 由来説を一そう強めた<sup>26)</sup>。Harth 女史も後段に Descartes の影響をみとめている<sup>27)</sup>。まず前段の吟味からはじめよう。

Weber 氏はこの「原子が分離し、そして同様の性質をもつ原子が相集まる説」が Descartes ではなく古代原子論と一致していることを指摘し<sup>28)</sup>、Alcover 女史は文中の《chaos》の語に注目して、《chaos》からはじめるのが Lucrece や Gassendi など原子論者の常道であったことを付加えて Descartes 影響説を否定し、さらにまた、神が物質を創造するというのも Descartes からきたというよりは、Cyrano の concession であろうと想像する。また同類相集まる理由に《amour inconnu》つまり一種の相互的 sympathie を云うのは Descartes ではもちろんなく、Lucrece などでもなく、ルネサンスの naturalistes の影響だろうと推定している<sup>29)</sup>。これにたいして Vartanian 氏はこの箇所にて Descartes の「渦動」vortex による宇宙創成説の片鱗を見るが、その主張の根拠はなんら明確に示されていない<sup>30)</sup>。

ところで《chaos》からはじめて、原子の離合集散で世界の成立を説明するのは、たしかに古代以来原子論の伝統である<sup>31)</sup>。しかし神が物質を創造し、物質を無限の部分に分割し、それに運動をあたえることによって宇宙全体が生成したというのが Descartes による説明でもあった<sup>32)</sup>。そして《chaos》なる語はたしかに *Principes* にはでてこない<sup>33)</sup>が、*Discours de la Méthode* では使われている<sup>34)</sup>し、また Cyrano は後述(e)に引用の文章で明らかのように、Descartes がその宇宙創成論を物質の《chaos》からはじめたと理解している<sup>35)</sup>ので、この点からの反駁は問題にならない。また神による創造云々は、たしかに Alcover 女史のいうように、Cyrano の concession でもあろうが、しかし Descartes の説明を採ったのだと見ればこれもまた別に問題はない。さらに *Soleil* の他の箇所では《atome》なる語を使用することに躊躇しない Cyrano<sup>36)</sup>が、ここでは Descartes と同様、《corps》、《particule》とって《atome》を使っていないことにも注目しなければならない。さらにもっとも重要なことだが、この前段の主要なテーマは、粒子の形状と運動による恒星、惑星の生成および運動の説明であるが、古代原子論は、あるいはこれに明確な説明をあたえていないか、あるいはこれをちがった原理で説明している<sup>37)</sup>。これにたいして Descartes は、物質の粒子の形状と運動というこの原理によって、



それらすべてを十分に説明しているばかりか、Descartes の説明と Cyrano の敘述とのあいだには大きな類似がある。たとえばはじめの、《chaos》から無限の粒子が分かれ、その粒子の「渦動」から天体が生成するという構想自体が Descartes のものだし<sup>38)</sup>、さらに細部に入れば、天体がたまたま自分の圏内に入ってきた小さい惑星を回転させるという説明(*d'autres [particules]... ont dû mesme, s'évaporant de la masse et cheminant dans leur fuite d'une allure semblable, faire tourner les orbles moindres qui se rencontroient dans la sphère de leur activité*)は、惑星が太陽のような恒星のまわりを回転するのは、惑星を中心とする一つの「渦動」*tourbillon* が破壊されて、その惑星が、太陽を中心とする一そう大きい「渦動」の中にまきこまれたからだとする Descartes の説<sup>39)</sup>と矛盾しないし、さらに上記引用文中のイタリック体の部分をみれば Descartes の渦動説に一そう近づくように思われる。Vartanian 氏は Cyrano のこの箇所を引用する際、このイタリック体の部分を、厄介と見てか、省略してしまっている<sup>40)</sup>が、ここを省略して、漠然と、恒星が小さい惑星を回転させるという趣旨だけをのこすならば、Cyrano の説明はとくに Descartes 的でも何でもない。そうでなくて Cyrano のこの一見不可解な敘述をできるかぎり無理なく理解しようとする、「天体（の粒子の一部）が天体の塊から蒸発して、同様の歩みぶりで（つまり同様に円運動をしつつ）逃げながら進み」<sup>41)</sup>云々のうち、「天体の本体から蒸発した粒子」という説明は Descartes 的ではないが、いまかりにこれを Descartes のいわゆる第2元素 *le second element*、すなわち天空を満たしている第2元素ととれば、恒星を中心に回転している第2元素の渦動が、その中に惑星をまきこんで、共に恒星のまわりを回転させるというイメージは Descartes の説明からそうとおくないのである（Descartes との相違の意味はすぐあとでのべる）。

もちろんこの前段には Descartes 説からみればおかしい点はいくつかある。その最大のものは、Descartes が空虚 *le Vuide* の存在を否定するのに Cyrano が空虚肯定説を捨てていない点である。そのことはこの箇所では間接的にしか表われていないが、後述(e)で Cyrano は他ならぬ *Principes* のこの

部分を槍玉にあげて、神が物質の《chaos》を無数の部分に分割してその各々に運動をあたえたとしても、もし空虚の存在を前提しなければ、それらが運動をはじめるとは不可能であると主張して、Descartes の空虚否定説を攻撃している (p. 184). だから Cyrano がこの宇宙創成、天体の生成の敘述で Descartes の理論を借用したとしても、その場合 Descartes の空虚否定説まで受入れていないことはたしかである。そして、Descartes の空虚否定を受入れないで、しかも Descartes の宇宙生成、天体の生成の理論を受入れる、この奇妙な立場が Cyrano のこの敘述にも反映している。前頁の引用文のイタリック体の部分がそれであって、惑星が恒星のまわりを回転する理由を、天空をうずめ、恒星を中心に渦動する第2元素の働らきによって説明する Descartes に賛成し、なおかつ空虚の存在を肯定するとすれば、Cyrano がここで書いているように、空虚な天空の中を、恒星から発する粒子が渦動しながら惑星をひっぱってまわると考えざるをえず、そう解すれば Cyrano のこの表現が、かなり無理なく理解できるように思われるのである。

Descartes 説との相違についてさらに付加えるならば、Cyrano によると、「兩極を軸にして回転する」と同時に円を描いて運動する粒子が集まって、円い「天体」Astres をつくるのであるが、Descartes によれば、そのような運動をするのは、天体をつくる粒子、つまり Descartes のいう第1元素 le premier element ではなくて、主として、それより大きくて、天空を満たすところの第2元素なのであり<sup>42)</sup>、また天体の生成は、Cyrano がここでのべるように、天体をつくる粒子自体とその運動が原因なのではなくて、渦動 tourbillon を描いて回転する第2元素の運動の結果、渦動の中心に生じた空隙を第1元素が満たすことによるのだった<sup>43)</sup>し、さらに天体が円いのは、天体をつくる粒子自体の形と運動のためではなくて、天空を満たして渦動する第2元素が、その「渦動の中心から遠ざかろうとする傾向」をもつためだった<sup>44)</sup>。さらにまた Cyrano が、同類同志を結びつける原因として、「未知の愛なる原理」という、Descartes の思想とはまったく相容れない animiste な原理を導入していることも注目に値する。これについては後にもう一度触れるが、こういう風にみえてくると、Cyrano

がこの前段でDescartesの理論のつよい影響をうけていることは疑いないが、しかしそれをそのままのみに受入れて盲従しているのではなく、自分の考えと矛盾しないところだけを取り入れ、それと抵触するところは巧みに修正し、大いに自主性を発揮しているとみてさしつかえないだろう。

ではつぎに後段はどうだろうか。太陽系の歴史に関するこの壮大な仮説は果してDescartesの独創だろうか。1610年の太陽の黒点発見は *incorruptibilité des cieux* という数千年の通念をゆるがして人々に深刻な衝撃をあたえたが、そこから、太陽の黒点が発達すれば、やがて太陽も「不透明な球」になるという大胆な着想、さらにまた、われわれの生息している地球は「小さい太陽」であり、地球の表皮はいわば太陽の黒点の堆積にほかならず、地球の中心には太陽をつくる物質が今なお存在しているという奇想天外な仮説までの距離は相当なものであって、たしかに飛躍的といってもよく、たとえばCyranoも読んだらしいBrunoは、黒点発見以前に殺されているにもかかわらず、太陽の黒点の存在を予感したが、それは「地球に火の諸部分があるように、太陽にも水の諸部分がある」ためだと考え、太陽も地球も同じ物質で構成されていると推論するにとどまった<sup>45)</sup>し、Cyranoが愛読したというCampanellaにも、またGaliléeにも、この大胆な着想はないようである<sup>46)</sup>。Cyranoに大きい影響をあたえたGassendiにこの仮説の存在しないことは、先に触れたように、Alcover女史がすでに指摘している<sup>47)</sup>。そしてこの説がDescartesの独創であり新機軸であることは科学史の通説らしい<sup>48)</sup>ので、今の段階ではDescartesの天才的な想像力の産物と考えておこう<sup>49)</sup>。そしてCyranoはここでは、前段とちがって何の留保もなく全面的にDescartesに追随しているとみてよい<sup>50)</sup>が、Cyranoのこの態度を、天才の大胆で奇抜な想像力にたいする全幅の共鳴と考えたい。しかもこのDescartesの未来ある着想が、18世紀末に再びとりあげられるまで百数十年間、捨ててかえりみられなかったことを思えば、Cyranoのこのadhésionは一そう特筆に値すると思われるのである。そうして前段、後段を通じての主題、すなわち太陽系を含めた宇宙の生成と歴史という重要な主題に関してCyranoが発言しているのは、*L'Autre Monde* 全体の中でもここだけであ

ることを思い、後述(e)でのべられている Descartes 讃辞のなかで、Descartes の自然学のすぐれたところとして、何よりもまず「美しく、すばらしい宇宙の構造の解明に資した」<sup>51)</sup> 点が強調されていることを思えば、この(b)の部分における Descartes の影響は相当に重視していいのではないかと思われる。だがこれについては、その影響の意味をも含めて、のちにもう一度触れることにして、これでひとまずこの項を終りたい。

(c) 血液の循環　ますます太陽に近づくにつれて Cyrano の体は透明になり、かれは自分のさまざまな内臓が鮮かな「自然の色」を保って動いているのを見ることになる。すなわち

mes poulmons conservoient encor sous un rouge incarnat leur mole délicatesse ; mon coeur toujours vermeil balançoit aisément entre le sistolle et le diastolle ; mon foye sembloit brûler dans un pourpre de feu, et *cuisant l'air que je respirois* continuoit la circulation du sang ... (p. 135).

Alcover 女史はここで Cyrano が「Descartes の意見に組している」と見る<sup>52)</sup> が、それは一体どういうことだろうか。「肝臓が血液の循環をつづけている」などという主張は Cyrano 以外のだれのものでもない。いまかりに百歩ゆずって「肝臓」を「心臓」と読みかえ、心臓が血液の循環をつかさどると読みかえるとしても、衆知のごとく血液循環論者 = cartésien とはいえないのであって、心臓を一種の吸上げポンプと見る Harvay らと、心臓を「光のない火」<sup>53)</sup> をもった熱機関と考え、血液の循環は心臓の熱による血液の膨張の結果だと考える Descartes とが対立していた。Alcover 女史もそのことは知っており、Bernier の文章などを引用しているが一向に判然としない。また上掲引用文中の《*cuisant l'air que je respirois*》を女史はわざわざ *souligner* しているけれども、心臓が熱をもっていることはスコラ以来の旧医学の通説であり、この通説をそのまま採用したからこそ Descartes は誤ったのであって<sup>54)</sup>、これがとくに cartésien だということはもちろんできない。また心臓が「空気を煮る」という説は Descartes にはない。呼吸する空気を心臓が煮 (*coction*) て、「生命力」*esprits vitaux* に練りあげるというのもスコラ以来の旧医学の

伝統的な説明であるが、これは **Descartes** には採用されなかった<sup>55)</sup>。このあたりといい、また心臓でなく肝臓を生命保持の中心と考えている点といい、**Cyrano** の生理学に関する考えはむしろ大へん古臭いのである。あとの点について付加えると、上掲引用文の少し前で **Cyrano** は、人間が泥から太陽の熱による3回の「煮こみ」**coction** によって誕生するさまを「黒点人」に語らせている(pp. 130—131)が、それによれば、第1回の「煮こみ」がおこなわれる場所は肝臓であり、第2回目が心臓、第3回目が脳なのであって、それはまた植物的靈魂、動物の靈魂、人間の靈魂というあの古来の区別に対応させられており、ここでも通説を一步も出ていない。これに反して **Descartes** は、新らしい数々の観察によって、胎児の体内に最初に形成されるのが、肝臓ではなくて心臓であることを確認し、この事実にもとづいてかれの独創的な生理学を築いたのだった<sup>56)</sup>。こういうわけで **Alcover** 女史指摘の箇所には **cartésianisme** の片鱗も見出せないなのであって、ここでの **Cyrano** は古い医学説と、おそらくじりの聞きか新らしい血液循環説とを混合し、しかもうまくこねあげそなたと評すべきだろう。なお女史は **Gassendi** が肝臓に「生物学的機能の中心」をおいたことを指摘しているが、たしかに女史の指摘通り、1627年の **Gassendi** はそうであったかもしれないけれども、晩年にはかれもまた心臓による血液循環説に傾いている<sup>57)</sup>ことを、この大学者の名譽のために付加しておこう。

(d) 極は天の口 鳥の国で裁判にかけられ、死刑を宣告された **Cyrano** は特別の赦免によって危く一命をとりとめ、森をさまよううち木の国に入る。そこで **Dodonne** のかしの木から「愛人木」**Arbres amans** の話を聞くが、その長い博識な話の一環として、鉄と磁石のことが物語られ、磁石が極に向かう理由を説明するために、「極とは天の口」であって、太陽が地球にまき散らした「光」、「熱」、「火性の小物体」、「生命の小物体」、「魂」(これらすべては同じものとみなされている)を回収する「風窓」**Soûpiraux** であり、こうして物質である魂が、天と「この宇宙のすべての球体」とのあいだを永遠に循環するのだと説明される。

Les Pôles sont les bouches du Ciel par lesquelles il reprend la

lumière, la chaleur et les influences qu'il a répandues sur la Terre ; autrement, si tous les trésors du Soleil ne remontoient à leur source, il y auroit longtemps (toute sa clarté n'estant qu'une poussière d'atômes enflâmez qui se détachent de son globe) qu'elle seroit éteinte et qu'il ne luiroit plus, ou que cette abondance de petits corps ignés qui s'amoncèlent sur la Terre pour n'en plus sortir l'auroient déjà consommée. Il faut donc, comme je vous ay dit, qu' il y ait au Ciel des soupiraux par où se dégorgent les replétions de la Terre, et d'autres par où le Ciel puisse réparer ses pertes, afin que l'éternelle circulation de ces petits corps de vie pénétre successivement tous les globes de ce grand Univers. Or les soupiraux du Ciel sont les pôles par où il se repaist des âmes de tout ce qui meurt dans les Mondes de chez luy, et tous les Astres sont ses bouches et les pores par où s'exhalent derechef ses esprits (pp. 175—176).

この箇所は Descartes の影響をはじめてみとめたのは Alcover 女史であって、女史はこの箇所の sources として Bruno, Epicure と並んで *Principes* をあげている<sup>58)</sup>。それを整理すると、まず Bruno は *De Immenso* において、太陽が、その火や光としてまき散らした養分を回収すると説くが、その回収の手段は、大洋が、蒸発によって失った水分を、川からの流入と雨によって回復するといった比喩などで説明されており、Cyrano の文章とは程遠い<sup>59)</sup>。つぎに Epicure は原子が「風窓」*soupiraux* のような出入口を見出して、世界のあいだを出入するのべているようで、これが事実だとすれば、Cyrano と大分近くなる<sup>60)</sup>。しかし「極」*pôle* が登場するのは、ほかでもない *Principes* であり、*Principes* 以外にはない。そしてまた Descartes が極をもちだしたのも Cyrano と同様、磁石の性質を説明するためであった。すなわち Descartes によれば、三つの溝をもった 2 種類の「有溝微小部分」*partie canulée* が、一方は北極を中心とする北半球から南極を中心とする南半球へ、他方は南極を中心とする南半球から北極を中心とする北半球へと、両極を結ぶ軸に平行に地球を貫いて流れたのち、それぞれ空気中を通して元の場所へ戻るという循環運動をするはずであり、これによって磁石のもつさまざまな性質が説明される<sup>61)</sup>。さら

に一部の「有溝微小部分」は、地球を貫いて空気中に出たのち、赤道のはるか上方あたりから再び天に戻るとされている<sup>62)</sup>。Cyrano との類似は一目瞭然であり、かれがここで Descartes からヒントをえたことも明らかであるが、そのことは同じ *Soleil* の別の箇所によっても確かめることができる。*Soleil* の冒頭で、月から帰った Cyrano は、sorcier とみなされて、Colignac 村の司祭に煽動された百姓共につかまるが、百姓どもがたまたま Cyrano のもっていた本の一冊を開けたところ、それが ≪la *Physique* de monsieur des Cartes≫ であり、開けた頁が、たまたま「磁石の性能を説明する」奇怪な「ひきがえる」crapaud のような絵だったからである<sup>63)</sup>。しかも Cyrano は Cussan の城に一月ばかり滞在するあいだの読書のためにと、この *Principes* をたずさえていたのだった<sup>64)</sup>。

このように Cyrano が *Principes* からこの奇抜なアイデアを借用したことは明らかだが、しかしそれにもかかわらず、両者のあいだにはまた少なくとも 2 つの注目すべき相違がある。まず Descartes では、前述のように「有溝微小部分」が出入するのは、北極または南極にかぎらず、ひろく北半球と南半球の全体であった<sup>65)</sup>。ところが Cyrano ではそれは「極」であり、「極」にかぎられている。またそれに付加えていえば、Descartes では、極から出た「有溝微小部分」の一部が天に戻るのは、地球を大きくまわって、ちょうど地球の赤道のはるか上方あたりからだった<sup>66)</sup>が、Cyrano の文章から受けるイメージでは魂がそんなまわり道をすると考えられず、極を出たのちまっすぐ直接に天に舞戻るのである。これらは Cyrano の曲解か、あるいは故意の焼直し、おそらく後者であって、Descartes のこの箇所の説明に頻りに繰返される ≪pôle≫ の語に印象を受け、Descartes の説明を借用しながらそれを一そうファンタスティックにし、「極は天の口」という一そう奇抜な説をつくり出したのであろう。

第 2 の、もっと重要な相違点は、極から出入するという物質の性質である。Descartes の「有溝微小部分」は 3 種の元素のうちもっとも細かい第 1 元素—悪評の高い「微細な物質」*matière subtile* がすなわちこれである—に属し、

そのうちではもっとも大きいものとされている<sup>67)</sup>。磁石の性質を説明するためにのみ考案されたような<sup>68)</sup>、形からいってもまったくファンタスティックな代物である<sup>69)</sup>が、しかしその働らきは、他の元素と同様まったく機械的であり、意志や感情などをもたないことはもちろん、他から動かされることなしには決してみずから動かない。Descartes の物体 *corps* の概念からして当然である。これにたいして Cyrano の物質は「火性の小物体」*petits corps ignés*、「生命の小物体」*petits corps de vie* であり、「魂」であって、太陽から発して動植物、人間をつくった「魂」が、そのものの死滅と共にふたたび古巣に戻り、「粗大な物質から清められて、あの大きな完全な動物である太陽の血となり生命力 *esprits vitaux* となる」<sup>70)</sup>。ここには16世紀のイタリア・ルネサンス思想と共通な *animiste* 的発想が明らかであって、それはまた *Soleil* を通じて流れるライトモチーフでもある。こうしてこの点でも Cyrano は Descartes のアイディアは借用しながら中味はまったくすりかえて、自分の哲学の敘述にうまく利用している。事実 Cyrano は光、熱、「魂」が、太陽から発して万物を生かしたのち、ふたたび太陽に戻るという思想は繰返しのべながら、「魂」が太陽に戻る手段になると、いつも炎のように立昇るほか能がなかった<sup>71)</sup>。かれが *Principes* に見出した「極は天の口」の着想は、この欠陥を補完する格好の材料だったのである。

\*

以上 *Soleil* の中で Descartes と関係があるといわれる5つの箇所のうち (a), (b), (c), (d) の4つの吟味を終えたが、紙数の都合で、もっとも重要な最後の (e) **Cyrano と Campanella の Descartes 論争** と暫定的結論、つまり *Cyrano cartésien* という当面の問題について、*L'Autre Monde* の分析からひきだすことができるかぎりでの結論は、次号にまわさざるをえなくなった。このような尻切れとんぼの形で本稿を了えることに御海容を請う次第である。なお次稿に引続き、はじめに触れたように、*Fragment de Physique* の分析に入る予定であり、それが完結してはじめて *Cyrano cartésien* の問題に決定的な結論を下すことができるはずである。前途はまだなかなか遼遠といわなければならない。



## 注

- 1) たとえば E. Canselier, *Cyrano de Bergerac, philosophe hermétique*, *Les Cahiers d'Hermès*, I (1947), pp. 65—82.  
 A. Adam, *Histoire de la littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle*, tome II, 1957.  
 A. Lavers, La croyance à l'unité de la science dans *L'Autre Monde*, *Cahiers du Sud*, 47 (1958), pp. 406—416.  
 L. Erba, L'incidenza della magia nell'opera di Cyrano de Bergerac, *Contributi del Seminario di Filologia moderna*. Serie francese, I (1959), pp. 1—74.  
 J. S. Spink, *French Free Thought from Gassendi to Voltaire*, 1960 (traduction française, 1966).  
 A. Adam, *Les libertins au XVII<sup>e</sup> siècle*, 1964.  
 Ch. Liger, Les Cinq Envols de Cyrano, *La Nouvelle Revue Française*, 1965, pp. 242 —256 et pp. 427—442.  
 E. W. Lanier, *Cyrano de Bergerac and the Univers of the Imagination*, 1967.  
 Erica Harth, *Cyrano de Bergerac and the Polemics of Modernity*, 1970.  
 Madeleine Alcover, *La pensée philosophique et scientifique de Cyrano de Bergerac*, 1970.  
 また éditions としては  
*L'Autre monde*, publié par Henri Weber, Editions sociales, 1959.  
*Les Etats et Empires de la Lune et du Soleil*, publiés par Claude Mettra et Jean Suyeux, J.-J. Pauvert, 1962.  
*Voyage dans la Lune*, publié par Maurice Laugaa, Garnier-Flammarion, 1970.  
*Lettres*, publiées par Luciano Erba, Milano, 1965.
- 2) Lachèvre, *Les Oeuvres libertines de Cyrano de Bergerac*, 1921, tome I, p. 183.
- 3) Mongrédien, *Cyrano de Bergerac*, 1964, pp. 202—203.
- 4) Cyrano de Bergerac, *Histoire comique des Etats et Empires de la Lune et du Soleil*, p.p. P.L. Jacob, Bibliophile (すなわち Paul Lacroix), 1858, Réédition, 1962, p. 36 et p. 329 note 2.
- 5) Lachèvre, *op. cit.*, p. XCIX note 2 et pp. 1—2.
- 6) Vartanian, *Diderot and Descartes. A Study of Scientific Naturalism in the Enlightenment*, 1953, p. 56.
- 7) Spink, *La libre pensée française de Gassendi à Voltaire*, 1966, pp. 81—82.
- 8) Alcover, *op. cit.*, p. 146.
- 9) Harth, *op. cit.*, p. 99 sqq. とくに pp. 101—103 et pp. 107—108. なお Weber 氏も「Cyrano は gassendiste から, だんだん cartésien の列にうつっていった」とみている (Cyrano de Bergerac, *L'Autre Monde*, p.p. Weber, p. 16) から,

同氏も Harth 女史と同じ意見とみることもできるが、それが *Fragment de physique* を含めての解釈なのか、*L'Autre Monde* のみを問題にしているのかははっきりしないから、ここではとりあげない。

- 10) Cyrano de Bergerac, *Histoire comique...*, p.p. Jacob, pp. 353—380.
- 11) *Les Œuvres diverses de Monsieur Cyrano de Bergerac*, Jacques Desbordes, Amsterdam, 1741, tome second, pp. 338—389.
- 12) Cyrano de Bergerac, *Histoire comique...*, p.p. Jacob, p. 352 note 1.
- 13) Brun, *Savinien de Cyrano Bergerac. Sa vie et ses œuvres d'après des documents inédits*, 1893, p. 324.
- 14) Lachèvre, *op. cit.*, p. XCIX note 2 et p. 2.
- 15) ただ唯一の例外は Harth 女史であって、女史は *Fragment de physique* と Rohault との類似はみとめながらも、この作品の中に Cyrano の独創性をいろいろ見出そうとしている (たとえば Harth, *op. cit.*, pp. 103—104)。これについては次稿でべる。
- 16) Vartanian, *op. cit.*, p. 56.
- 17) Harth, *op. cit.*, pp. 107—108.
- 18) Spink, *op. cit.*, pp. 81—82.
- 19) Alcover, *op. cit.*, p. 19. なおこの疑念は、Cyrano cartésien 派に一応数えられる Lachèvre によってもすでに提出されていた (Lachèvre, *op. cit.*, p. XCIX note 2 および Cyrano de Bergerac, *L'Autre Monde*, p.p. Lachèvre, Garnier, 1933, p. 302 note 20).
- 20) Duhem, *Histoire des idées aéronautiques avant Montgolfier*, 1943, p. 367.
- 21) Alcover, *op. cit.*, p. 98.
- 22) Descartes, *Œuvres*, A. T., tome XI, p. 18. Cf aussi Descartes, *Œuvres philosophiques*, éd. Alquié, tome I, p. 332 note 1.
- 23) Baillet, *La Vie de Monsieur Des-Cartes*, II, p. 212.
- 24) Brun, *op. cit.*, p. 302.
- 25) Vartanian, *op. cit.*, pp. 56—57.
- 26) Alcover, *op. cit.*, pp. 101—103.
- 27) Harth, *op. cit.*, pp. 77—78.
- 28) Cyrano de Bergerac, *L'Autre Monde*, éd. Weber, p. 200 note 1.
- 29) Alcover, *op. cit.*, pp. 101—102.
- 30) Vartanian, *op. cit.*, pp. 56—57.
- 31) たとえば cf. Epicure, *Lettre à Hérodoté*, 73—74 et *Lettre à Pythoclès*, 88—91; Lucrèce, *De la Nature*, V, 416—508.
- 32) たとえば *Les Principes de la Philosophie*, III, 46. *Quelles sont ces suppositions*

参照.

- 33) そればかりか *Principes* では Descartes はむしろ太初の «chaos» に否定的である。«bien que ces loix de la nature soient telles, qu'encore mesme que nous supposerions le Chaos des poètes, c'est à dire vne entiere confusion de toutes les parties de l'univers, on pourroit tous-jours demonstrier que, par leur moyen, cette confusion doit peu à peu reuenir à l'ordre qui est à present dans le monde. . . toutefois, à cause qu'il ne conuient pas si bien à la souueraine perfection qui est en Dieu de le faire autheur de la confusion que de l'ordre, & aussi que la notion que nous en auons est moins distincte, j'ay creu deuoir icy preferer la proportion & l'ordre à la confusion du Chaos . . .» *Principes*, III, 47. *Que leur fausseté n'empesche point que ce qui en sera déduit ne soit vray.*
- 34) «Après cela, ie monstray comment la plus grande part de la matiere de ce Chaos deuoit, en suite de ces loix, se disposer & s'arrenger d'une ceraine façon qui la rendoit semblable a nos Cieux», A. T., tome VI, p. 43.
- 35) «il [Descartes] a éably pour commencement des choses un cahos de matière tout à fait solide, que Dieu divisa en un nombre innombrable de petits carreaux . . .», (p. 184).
- 36) たとえば, 後述(d), 本稿32頁の第4行参照.
- 37) たとえば cf. Epicure, *Lettre à Hérodote*, 76—80 et *Lettre à Pythoclès*, 90—93; Lucrèce, *De la Nature*, V 509—533.
- 38) たとえば *Principes*, III, 46 *Quelles sont ces suppositions* 参照. なお *Principes* で盛に活躍する«tourbillon»なる語が説明付ではじめて登場するものこの章である.
- 39) Cf. *Principes*, III, 140. *Comment les Planetes ont pû commencer à se mouuoir* et III, 146. *Comment toutes les planetes peuuent auoir esté formées.*
- 40) Vartanian, *op. cit.*, p. 57.
- 41) 「逃げながら進み」は, 円運動をする粒子はたえず渦動の中心から遠ざかろうとするという Descartes の説明と一致する(cf. *Principes*, III, 58. *Comment il [un corps] tend à s'éloigner du centre autour duquel il se meut* 以下).
- 42) Cf. *Principes*, III, 46. *Quelles sont ces suppositions.*
- 43) Cf. *Principes*, III, 54. *Comment le Soleil & les Estoiles fixes ont pû se former.*
- 44) Cf. *Principes*, III, 61. *Que cela est cause que les corps du Soleil & des Estoiles fixes sont ronds.*
- 45) P.-H. Michel, *La cosmologie de Giordano Bruno*, 1962, p. 222.
- 46) たとえば Galilée は, Alcover 女史の指摘した Gassendi の場合 (Alcover, *op. cit.*, p. 102) と同様, 太陽の黒点を雲のごときものと考えている。«Des masses

très grandes qui, en des temps très courts, se produisent et disparaissent, qui durent plus ou moins longtemps, qui se distendent et se condensent, qui facilement changent de figure, qui sont en certaines parties denses et opaques, et en d'autres le sont moins, de telles masses ne ressemblent à rien d'autre près de nous qu'aux nuages», La première lettre de Galilée à Welser du 4 mai 1612, traduite et citée par B. Dame dans son article : Galilée et les taches solaires (1610—1613), in *Galilée. Aspects de sa vie et de ses œuvres*, p.p. le Centre International de Synthèse, 1968, p. 208. また cf. Maurice Clavelin, *La philosophie naturelle de Galilée*, 1968, p. 209.

- 47) Alcover, *op. cit.*, p. 102.
- 48) *Histoire générale des sciences*, publiée sous la direction de René Taton, tome II, La science moderne, 1958, p. 198 et pp. 409—410.
- 49) なお Alcover 女史は, Descartes がこの仮説を最初にのべたのは1637年出版の *Les Météores* だといっている (*op. cit.*, p. 102) が, これはもちろん1633年執筆の *Le Monde* のあやまりである.
- 50) なお付加えるならば Cyrano は Descartes の理論に大筋において従っているだけでなく, Cyrano の敘述は甚だ簡単であるが, 両者の類似は細部にまで及んでいる. たとえば Cyrano はここで太陽の黒点の生じる原因について, それが, 光と熱の小粒子がはなれたあとにのこった, 不透明な動かない塊で形づくられると考えているが, 同じ説明は *Principes* にもある(III, 94. *Comment elles [les parties canelées] produisent des taches sur le Soleil ou sur les Estoiles*). だがこれについては, Alcover 女史が *Principes* の原文を引用して指摘している (*op. cit.*, pp. 102—103) から, ここではこれ以上触れない.
- 51) «il [Descartes] a concouru à la belle et magnifique structure de cet Univers», (p. 184).
- 52) Alcover, *op. cit.*, pp. 106—107.
- 53) «vn de ces feux sans lumiere», *Disours de la Méthode*, Cinquiesme Partie, A. T., tome VI, p. 45.
- 54) Gilson, Descartes, Harvey et la scolastique, in *Etudes sur le rôle de la pensée médiévale dans la formation du système cartésien*, 1930, pp. 82—83.
- 55) *Ibid.*, pp. 60—61 et p. 84.
- 56) Roger, *Les sciences de la vie dans la pensée française du XVIII<sup>e</sup> siècle*, 1963, p. 144.
- 57) Sortais, *La philosophie moderne depuis Bacon jusqu'à Leibniz*, tome II, 1922, p. 177.
- 58) Alcover, *op. cit.*, pp. 126—127.

- 59) P.-H. Michel, *op. cit.*, p. 221.
- 60) Alcover 女史はここで Bernier の *Abrégé* のつぎの一節を証拠として引いている。  
 «Les atomes, reprenant leurs premiers mouvemens, s'enfuirent et s'écartèrent bien loin, ou tomberont bientôt en d'autres mondes, ou concourront avec d'autres Atomes pour former de nouvelles masses ; les premiers principes trouvant des *entrées* et des *sorties*, comme des espèces de *soupiraux*, entre les mondes...», (2<sup>e</sup> partie, 1678, tome I, livre 1, ch. 6, pp. 97—98).  
 しかしこれは Epicure の原文にはない。これにもっとも近い内容をもつと思われるものは *Lettre à Pythoclès* のつぎの一節(89)であるが、ここにも «soupiraux» のようなピトレスクな語はない。「On peut aisément concevoir qu'il y a une infinité de tels mondes, et qu'un monde de cette espèce peut naître soit au sein d'un monde, soit au sein d'un intermonde... Un tel monde est formé par germes appropriées qui affluent d'un ou de plusieurs mondes ou intermondes, et qui peu à peu s'ajoutent les uns aux autres, s'organisent, se déplacent et changent de lieu à l'occasion, reçoivent jusqu'à l'achèvement du monde commencé des courants d'atomes appropriés...», (traduction d'Ernout, in Lucrèce, *De la Nature*. Commentaire par Ernout et Robin, tome I, pp. XC I—XC II). Gassendi に存在するかどうか詳かにしないが、もし存在しないとなれば, Cyrano の死後に刊行された1678年版の *Abrégé* が Cyrano の sources になりえないことは明らかだから, Alcover 女史は Bernier を *Soleil* の sources として引用されるかぎりには, Gassendi に直接あたって調査する労を取られるべきであったと思われる。
- 61) Cf. *Principes*, IV, 133. *Explication de la nature de l'aymant* et IV, 146. *Comment les parties canelées prennent leur cours au travers et autour de la Terre.*
- 62) Cf. *Principes*, IV, 147. *Qu'elles passent plus difficilement par l'air & par le reste de la Terre extérieure, que par l'intérieure.*
- 63) «ayant décousu le parquet, et au premier volume qu'ils [des villageois de Colignac] ouvrirent s'estant rencontré la *Physique* de monsieur des Cartes, quand ils apperceurent tous les cercles par lesquels ce Philosophe a distingué le mouvement de chaque planète, tous, d'une voix, heurlèrent que c'estoit les cernes que je traçois pour appeler Belzébut. Celuy qui le tenoit le laissa choir d'appréhension, et par malheur en tombant il s'onvrit dans une page où sont expliquées les vertus de l'aimant...», (pp. 108—109). なおこの文章に附随してもう一つ指摘すると, Cyrano が読んだ Descartes の *Principes* は 1647年の仏訳本でなく, 1643年のラテン語初版であるように思われる。というのは後

- 者では図 *planches* の各々はそれぞれ該当のページに組込まれてあるが、前者では最後に一括してまとめてある。上記引用の *Cyrano* の一節が、後者の方にはるかにピッタリであることは明らかだろう。このことは次稿でもう一度とりあげるはずである。
- 64) «Nous délibérâmes de partir le jour mesme. Je les [le comte de Colignac et le marquis de Cussan] suppliy de se mettre donc en chemin devant, parce que j'estois bien aise ayans (comme ils venoient de conclure) à y séjourner un mois, d'y faire porter quelques livres», (p. 107). なお *Cyrano* のこの文章を額面どおり受取ると、かれが *Principes* を読んだのは *Soleil* 執筆の前、そう遠くない時期だということになる。この点については、次稿でもう一度触れる。
- 65) «toutes celles [les parties canelées] qui viennent de la partie du Ciel marquée E, qui est le Zud... ont en la moitié de la Terre CAD les entrées des pores, par où elles passent sans cesse en ligne droite jusques à la superficie de son autre moitié CBD...», *Principes*, IV, 146. なお、図 *planche* によれば A は南極、B は北極、C、D は赤道あたりを指す。
- 66) «Il faut aussi remarquer... qu'il y en a d'autres, qui retournent dans le ciel vers G & H...», *Principes*, IV, 147. なお図によると、G および H は赤道あたりの上方の天空を指す。そのあたりから天空に戻る理由については長くなるからここではのべない。Cf. *Principes*, III, 108. *Comment la matière du premier element prend son Cours par ces pores.*
- 67) たとえば *Principes*, III, 93. *Qu'entre les parties canelées & les plus petites du premier element, il y en a d'une infinité de diuerses grandeurs* 参照。
- 68) Pascal の有名な酷評がある。«Si cette façon de prouver est reçue, il ne sera plus difficile de résoudre les plus grandes difficultés, et le flux de la mer et l'attraction de l'aimant deviendront aisés à comprendre, s'il est permis de faire des matières et des qualités exprès», *Lettre au P. Noël du 25 oct. 1647*, in Pascal, *Oeuvres complètes*, Ed. J. Mesnard, tome II, 1970, p. 522.
- 69) 形は三角錐形で表面に三条の溝 *rayes et canaux* があり、かたつむり *limaçon* の殻またはネジのようだという。Cf. *Principes*, III, 90. *Quelle est la figure de ces parties que nous nommerons canelées.*
- 70) «purgées de la grosse matière qui les [les âmes] empeschoit,... elles sont employées à former le sang et les esprits vitaux du Soleil, ce grand et parfait animal», (p. 182).
- 71) たとえば «dès qu'une Plante, une Beste ou un Homme expirent, leurs âmes montent, sans s'éteindre, à sa sphère, de mesme que vous voyez la flamme d'une chandelle y voler en pointe, malgré le suif qui la tient par les pieds», (p. 182). (本学助教授)